
レブリアとぷうたんの物語 ~短編「あのレブリアに・・・」の巻き~

アストン・ヴォルテクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レブリアとふうたんの物語 ～短編「あのレブリアに・・・」の

巻き～

【Zコード】

N7949Y

【作者名】

アストン・ヴォルテクス

【あらすじ】

38歳の「ごく普通の少年」、ミゲール・レブリア、通称レブリア。彼はボケで女好きで勉強が宿敵だといつてはいる「ごく普通の少年」であり、そんなダメなところを直すまで卒業が出来ないといわれているおかしくお菓子^{おかしい}ランダムー学校にいた。だが、そんな彼に、今回はどうともいいことが起きるのであった。

(前書き)

短編です。

俺は、長編を書くのはとても苦手なので、これを書くのは3日かかりました。

まあ、見てください。

「元出でるキャラクター（以前のあるもの）は本編でも出てきますので。

あと、活動報告にも書きましたが、これから、題名は「レブリック」と「ふたんの物語」になります。

「めんなさい。

この出でる主人公ガールも今は「レブリック」になつてあります。

今回はシリアスで押しています。

「お、おかしくお菓子（おかしい）」ランダムー学校からひょっこ離れた、オカシティ駅である。実は、おかしくお菓子（おかしい）ランダムー学校の生徒達は年に3度だけ、学校外へ出かけることが出来るのである。そして、そのオカシティ駅の商店街で、事件は起きた。

チンピラ「おうおいおうー！ テメ何様のつもりだん！ ？ ぶつかつてきて無言ですか。 ・・・ ふざけんじやねえ！」

チンピラはたくさんの人人が通っているにもかかわらず、一人のちびっちょい少年に膝蹴りをした。その少年は、見た目は8歳程度だらしか。

髪はオレンジ色でいたるところが跳ね上がりついていて、猫のような目、そして、首には金色に輝くペンドントのようなものをつけており、ボロイチシャツに穴がところどころに空いているズボンをはいていて、靴もボロボロだった。そして、前からだらうが、右目すぐしたにはまるで爪で引っかかれたかのような3本の傷跡があった。身長はおよそ100センチだ。

そのこの顔面にチンピラの膝蹴りはヒットした。

少年「ぐつー・・・」

少年は、鼻血を出しながらかなり吹っ飛び、商店街のお花屋さんのところまで吹っ飛んでいき、花の上に転がっていた。その店員は悲しそうな顔をしていた。少年がやられていての悲しいではない。

花が潰されてのかなしいだ。少年は、少ししてから、花のところを右手で押さえ、何とかたつた。だが、今度はチンピラBにお腹を一発やられてしまった。

チンピラB「ほらほら、店員さんに謝りなよー花潰されて悲しんでんじやん…? オラー！」

チンピラBは少年の頭を強く握り締めると、花屋の所まで突き飛ばした。店員は、それと同時に、後ろへ下がる。それもうめき声を上げて。周りにいた野次馬達もどん引きする。

チンピラC「おいクソガキ～。今度は土下座でもしてもらおうか!? この鉄板の上でな！」

チンピラCはそういうと、すぐそばに立つた焼きそばのところまで少年を連れて行き、熱い鉄板の上に立たせようとしていた。と、そのときだった。何かがそのチンピラCの頭に直撃、即気絶してしまった。逆に、チンピラCがその鉄板の上に顔をつけてしまった。かなり氣絶しているらしい。そのため、鉄板がジューっとなつても一切起きなかつた。更にその上に少年が乗つかった。

そして、これを見ていたチンピラたちの親分のようなもの、ボスが間に入ってきた。

ボス「おい誰だ！俺様の仲間にでえ出したやつはよー出できやがれくそ野郎！」

ボスがそういうと、一人の男が手を上げて、そこへやつてきた。そいつは・・・

レブリア「ほーい。俺だけビ?」

そう、なんとレプリミゲであった。

ボス「テメヒか・・・名は?」

レブリア「レブリア。ミゲール・レブリア分かつた?もう一回いおうか?」

レブリアがもう一度いおうとしたとき、ボスはいきなりレブリアに殴りかかってきた。殴りかかってきたのだが。レブリアはかわした。しかも、ボスが殴りかかる前に。そう、まるでボスの動きを読んでいたかのように、殴られる前に、ボスの後ろにいたのだ。すると、突然チンピラのそばにあつた銀色の鉄の棒を掴むと、ボスの頭(ボスははげている)に攻撃した。鉄の棒は「ドカーン!」と音を立てた。そして、その音から数秒たつと、ボスは目を真っ白にしてそのまま倒れた。

レブリア「ふうー・・・何とか倒せた。おらおらーどんなやつでもかかってきやがれってんだ!!」

レブリアは鉄の棒を華麗にまわしながらいった。すると、そこら辺にいたチンピラどもは全員土下座をして、「すみませんでした!!！」と息を合わせていった。

その後、チンピラの親分は、昔殺人を犯していたということがわかり、すぐに逮捕され、チンピラどもはその街から姿を消した。

少年は、レブリアの背中見ると何かを決心したような顔つきになり、少年も今日は姿を消した。

（次の日の朝）

レブリアは、いつものように、寝ぼけた顔で寮から出た。すると、突然体全体に寒気が感じられた。何かの視線を感じたのだ。視線を感じるほうを見ると、そこには、髪はオレンジ色でいたるところが跳ね上がっていて、猫のような目、そして、首には金色に輝くペンドントのようなものをつけており、ボロイ・シャツに穴がところどころに空いているズボンをはいていて、靴もボロボロで、右足のすぐしたにはまるで爪で引っかかれたかのような3本の傷跡があり、身長はおよそ100センチぐらいの男の子が、おかしくお菓子（おかしい）ランダムー学校の門の前からレブリアを見ていたのだ。

レブリアはそれを見ると一瞬驚いて後ろに飛び跳ねていたが、不思議そうにその男の子の顔を見ていた。すると、何か思い出したかのように手を叩き、ドンドンその男の子に近づいていった。

その男の子は、レブリアが近づいてくると、だんだんと門から離れ、徐々に後ろに下がっていた。レブリアはそれを見ると、少し足を速めた。が、その男の子もそれと同時に足を速めた。

そして、ドンドンペースアップしているうちに、レブリアは学校外に出でてしまった。一度、一歩でも学校外に出た場合はそれも年に3度学校外へ出る数にカウントされ、一つ減ってしまうのだった。つまり、レブリアはまた学校外へ出でてしまったため、もうあと一回出れば、来年までは出ることが不可能ということになる。

だがレブリアは、そんなことにも気づかず、ドンドンそのお所の追つていった。そして、ある路地裏で、男の子はとまった。すると、いきなり小さな木刀を構えて、レブリアを向いた。すると、ちゅう

ヒルダリながらも、はつわづと喉へ聞こえる声でしゃべり始めた。

少年「俺の名はテンロウ・メズミーリス！お前の名前はー？」

男の子、テンロウは剣を構えたままレブリアに名を尋ねた。

レブリア「俺の名前はミゲール・レブリア。レブリアって呼んでくれ。で、でもなぜに木刀……？」

「テントロウ、そんなもの決まっておるう！俺を弟子にしてくれ！頼む！だから、一件の稽古をしてくれよー！」

レブリア「え?え?なに!」れどこいつは。

「テン口か、どうもこうもないわ！いいから俺をお前の弟子にしろといつていののだ！分からぬか！」

レブリア「はあ？」

テンロウはそういうながらレブリアに突撃してきた。だがレブリアはそれを難なくかわす。テンロウはがむしゃらに攻撃をしていた。だが、一つもあたらず、逆に顔面に一つ拳骨を入れられた。

レブリア「構えがなつてないぞ！そんななんじゃ、一撃でしとめられ
る。脇をしめて、腰を少し落とし、相手の皿を見る！行くぞーおり
やー！」

レブリアはそういうながら顔面を殴りつけとした。テンロウはそれを

ギリギリで顔を防いだ。

レブリア「そんなんじゃだめだ！防衛は相手の動きを先読みして、剣でかわす！例えばこの右手の殴りだつた場合は左に移動すると同時に相手の右手を左に流し、相手の腰につき！または、相手の懷に入り、腰を勢いよく切る！または相手の首元を突く！そして胴を突くそして、懷に潜ったときの足は、ちょうど相手の足の間に右足、軽くアキレス腱をするように、左足は後ろ！常に相手を自分に近づけさせないように剣を扱う！」

レブリアはなぜかいつの間にか真剣にテンロウに剣術を教えていた。テンロウも真剣に剣術を教わっていた。そして、それからやく5時間のこと。

テンロウ「てやあ！それえ！ていやあああああ――！――！」

レブリア「つほ！ ツフー・ツベー・ツヌツリ・ツ」

レブリアはいろいろなところが汚れていた。だが、テンロウはそれの3倍近く汚れていた。2人ともものすごい量の汗をかいていた。すると、レブリアは胡坐をかきながら口を開いた。

レブリア「よし、基本は全て教えてやつたつもりだ。これでいいだろ? 今度は俺の質問だ。何で、あの時チンピラどもに絡まれた?」

「それは……」テンロウ

レブリアが聞くと、テンロウは口を尖らせた。

テンロウ「……俺を弟子にしてくれるのであれば教える！でも、

弟子にしないんだつたら……教えないー。」

レブリア「えうか。じやあいいや。それじやあな。」

テンロウ「ちゅ、ちゅと待てよー。ビリして行くんだよー。聞きた
いんじやないのー。」

レブリア「だつて、聞くにはお前を弟子にしてなきゃこけないんだ
？だから帰るの。」

テンロウ「いや普通そこかえらなこでしょー。ビリしてだよー。俺のビ
こが悪い！」

レブリア「じゃあ・・・直感的にこづか。文句とか暴力とか泣くと
かはなしだぞ？」

テンロウ「うん」

レブリア「まずお前・・・体力無さすぎ。これまでに、何回休憩し
たものか。それと、お前にはそもそも剣術の才能が無さすぎる。普通
の人ならこんなものの2分で全部終わるのに、お前は5時間だぞ？こ
れだと、全然ダメだ。だから、剣術を教えるにもあきれるつてわけ。
わかつたか？」

テンロウ「・・・」

テンロウはその言葉を聞くと、涙目になり、路地裏を出て行つた。

レブリア「はあ・・・だから、いったのに。まあいつか。早く学校
にでもどるー。」

レブリアはそうつぶやくと、路地裏からでた。出たのだが、偶然にも、強盗をしているところを見つけてしまった。レブリアは困っている人をほおって置けるタイプではないため、強盗しているところへ、たくさんの警察がいるところへと近づいていった。

警察のいるところにつくと、そこは大きなショッピングセンターで、かなり高いところだつた。そこ屋上に強盗犯、警察からの噂だと、およそ100人の強盗犯がショッピングにいた全員を人質にして立っていた。その中には赤ちゃんや女子供もかなりいた。

警察A「観念しろ！お前達のやつていることは正しいことではない！俺達は同じ人間だ！人間同士、仲良くやろう」

オカシティでは有名な時岡刑事ときおかけいじがそういつた。すると、強盗犯は手に持つているマシンガンを上空に向けて何発か打つと、ミサイルランチャーをこちらへぶちかまってきた。それと同時に、10人ほどの警察官がスーパーの中へと入つていいくのが見えた。そこには、最近見たことあるような少年もいた。

髪はオレンジ色でいたるところが跳ね上がりつていて、猫のような目、そして、首には金色に輝くペンダントのようなものをつけており、ボロイエシャツに穴がところどころに空いているズボンをはいていて、靴もボロボロで、右目すぐしたにはまるで爪で引っかれたかのような3本の傷跡があり、身長はおよそ100センチぐらいの男の子だ。皆さんもお分かりのとおり、先ほどレブリアが剣術を教えていた少年、テンロウだ。

レブリアは少々驚いていたが、自分も、こっそりとスーパーの中へと入つていった。

「スーパー・一階」

ここは、スーパー一階だ。ここでは、主にレストランなどが多く開いている。が、今は何の気配もない。

レブリアは短剣を抜き、逆手に持つて構えた。そして、すぐ近くにあつた階段で、上の階へと上つていった。

「スーパー・二階」

ここはスーパー二階。主に、服や靴、植物などの家庭で必要なものが売っている。だが、ここも誰一人いなかつた。

また、すぐ近くの階段を上つた。と思いきや、服売り場で何かが落ちる音が聞こえた。レブリアは、恐る恐るその音がしたところへと近づいていった。すると、そこにはマシンガンを持った、黒いマスクをしていて黒い衣装で全体を隠している強盗犯と見られるものが一人いた。その強盗犯はまだレブリアの気配を感じておらず、前だけを集中してみていた。レブリアは静かに忍び寄り、静かに強盗犯の持つているマシンガンを蹴飛ばし、首を押さえつけて気絶させた。マシンガンは強盗犯が倒れてから短剣で壊した。

その後、また上へと上がつていった。

「スーパー・三階」

ここではたくさんの警察が倒されているのを確認できた。おそらく、

ここで乱闘を繰り広げたのだろう。だが、結果的に強盗犯のほうが戦力が高く、ここまで来た警察官は全員敗北したのである。「レブリアは思っていた。そう思つたとき、一番頭に飛び込んできたのは、あのテンロウであった。

レブリアは急いで上の階へとあがつていった。

四階、五階、六階、七階どんどん上がって行き、八階へ到達したレブリアはそこでテンロウの叫び声を確認した。その声はもう一つ上の階だった。どうやら、もう上の階が屋上らしい。地図にもそつかいてあつた。

「屋上」

屋上では、何万人もの人が何かの魔法で縛り付けられていた。そして、その周りにはたくさんの強盗犯が囮んでおり、真ん中には、テンロウが倒れていて、何人かの強盗犯にやられていた。

強盗犯F「もうお前は終りさあ！助けん中誰もきやしない！」ここにいる、かわいい子ちゃんたちだけは味とに持つて帰つて存分に遊んで、それ以外のやつは殺すんだ。その光景を見られたからには、女子供だからって容赦はしねえんだよ！クソガキ、まずはお前から・・・」

強盗犯Fが何かをいおうとしたとき、テンロウはその強盗犯Fの急所をけり、木刀を手にした。すると、何かの構えをしていた。レブリアは一目で分かつた。

レブリア「あれは・・・殺人流剣術・・・！」

そう、それは、殺人流劍術というものだった。

レブリア「殺人流劍術・・・きいたことがある。それを行うにはかなりの集中力と経験が必要で、経験の浅い見習い剣士が使うと最悪の場合はしにいたるとも言われている剣術流派・・・。今のテンロウが使うと死んでしまう!」

レブリアはそう思った。思つたのだが。予想はかなり外れた。なんと、テンロウは目を瞑つたまま次々と攻撃を仕掛けてくる強盗犯たちを一瞬できつていた。その速さは、剣神でないとできないようなくらいの速さだった。それを見習い剣士のテンロウはやつて見せたのだった。

すると、かすかにテンロウの言葉聞こえた。

テンロウ「残念だったな・・・。俺の両親、いや、俺の家族達は皆、暗殺者なんだ。これはその暗殺者達が教わる剣術。君たちは運が悪かつたとしか言いようがない。この剣で殺されりやうんだから!」

テンロウがそういうながら目を開けると、右目は普通の黒い目だが、左目は全部が真っ赤に染まっていた。

テンロウ「殺人流劍術・・・豚雷蝶!」
とんらいとうよ

テンロウがそういうながら木刀を回転させると、周りに雷の蝶が現れ、次々と強盗犯を倒していった。するとそれを見ていたレブリアの頭に何かがついたような感じがした。すると、うしろから女性の声が聞こえた。

女性「あら、のんきに戦いお見物?それより私と遊ばない?ただ

であそこもやらせてあげるよ?」

女性はそういうながら右手に銃を左手にナイフを持って、レブリアを脅し始めた。だが、レブリアはこんなものでは脅されない。レブリアは、女性が一瞬そっぽを向いたのを気に、左肘で一発食らわせ、右足で左に蹴り飛ばした。すると、女性はテンロウの豚雷蝶にあり気絶してしまった。それをきに、レブリアも突撃し、あまりの強盗犯たちをぶつた切つた。

それから、数分後。

レブリアとテンロウは強盗犯全員を倒し、捕まっていた人たち全員を助けた。捕まっていた人たちはすぐに警察の人たちに保護され、家に帰つたり、その場で倒れこんだりといろんなことになった。このことは翌日に、全国のニュースにも流れ、こういわれていた。

ニュースキャスター「昨日、オカシティにある有名なショッピングセンター、スーパーがおよそ100人の強盗犯たちに占領され、そのショッピングセンターにいた全ての客人や店員さんなどの人を人質にとつたという事件が発生しました。この事件には、数万もの警察が駆けつけましたが、特攻隊は全滅、戦力が無くなつたという事態に発しました。ですがそんな中、一人の少年と中年男性が駆けつけ、強盗犯を木刀と短剣で全滅させ、見事人質全員を無傷のまま救いました。この後に、2人には天皇陛下から直々に勇敢賞を送る予定です」

これが流れているときに、レブリアはテンロウとともに舞台となる天皇陛下の城へと向かっていた。テンロウはいつもの服装とは違い、ピッカピカのタキシードといつもの木刀を手にもち、レブリアもピッカピカのタキシードをきて短剣を背中の腰につけていた。

天皇陛下の城に着くと、すぐに開催され、レブリアとテンロウは一躍有名人となつた。そして、帰りのタクシーに乗つたとき、レブリアはテンロウにこう言った。

レブリア「お前を・・・弟子にしてやるよ」

テンロウ「え！？本当！？！」

レブリア「ああ。その代わり、約束してくれ、一度とあの流派は使うな。俺が、”レブリア流剣術静の乱”をお前に叩き込んでやるから。これから剣は、人を殺すためではなく、人を守るために使え」

テンロウ「うん！分かった！！ありがとうレブリア！！！」

こうして、レブリアは初めての弟子をもつた。そして、レブリアは決心した。

いつか必ず、このテンロウとともに剣神になつてみせん、と。

(後書き)

はい。今回出たテクノロジーは本編でも出ます。（前書きでもこいつたけど（汗））
あと、特訓記事も出ますが、覚えておいてください。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7949y/>

レブリアとぷうたんの物語 ~短編「あのレブリアに・・・」の巻き~
2011年11月23日19時00分発行